

友だち尽くし

——ドイツ学校物語論 4——

高 田 里恵子

悪魔を友にもてば

嗚呼、相沢謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我脳裡に一点の彼を憎むこゝろ今日までも残れりにけり。

『舞姫』(1890)の、あまりにも有名な、というより、あまりにも分かりやすい最後の一文である。主人公が高熱のために人事不省の数週間を過ごしているあいだに、荷厄介になってきていたドイツ人恋人を金銭で始末してくれて、出世街道への復帰の手はずを整えてくれるような都合のよい「良友」はたしかにそうどこにでも転がっているわけではあるまい。相沢謙吉は主人公太田豊太郎自身の一部であり、「憎むこゝろ」は一種の自己嫌悪であるとも考えられるが、まずはそのような問題には触れないでおこう。

もっとも、この同学同職の「良友」が、他の日本人留学生たちの嫉妬を買ってその讒言によって免官へと追いこまれるほど才能あふれる主人公にたいして、すこしも競争心を抱かないのは、やはり相沢が豊太郎の分身であることの証拠なのかもしれない。とにかく相沢謙吉は不自然なほど、それこそふと彼を憎みたくなるほど大らかに友に献身できる。彼の心の特徴は、友にたいする無私の献身ぶりではなく、同性の友にたいする潜在的ライバル意識の欠

如のなかにあるのだ。相沢は、心の襞がすくないぶんだけすがすがしい、すなわち男らしい。

相沢の男らしさの理由としてまず考えられるのは、彼が個人の感情なぞ越えた壮大な視野に立っているというものであろう。大臣の秘書として西洋列強の国々を飛びまわる相沢謙吉は、司馬遼太郎の描く明治の男だ。不平等条約の改正も済ませていない弱小国家にとって、いくつかの西洋語を自由に操る豊太郎は得難き人材なのである。つまり、大義と呼ばれるものが、若々しい日本にとってまだ実質性を帯びていて、男と男とを結びつけている。相沢の慧眼は豊太郎とエリスの「純愛」も、この日本を背景として眺めざるをえない。大英帝国を抜きつつある新興工業国ドイツ帝国と、まだ名も無きような日本との格差がなければ、無教養層出身の貧しいドイツ人少女と、東京大学を最年少最優秀の成績で出た（しかしドイツ人にはせいぜい未開国の小金持ちにしか見えないはずの）日本人留学生との恋愛がありえるだろうか。これは、国際恋愛がしばしば個人間の階級的文化的差異を克服もしくは隠蔽してしまう好例である。相沢はただしくも、ふたりの関係を「人材を知りてのこひにあらず」と切って捨てる。だが、これも拙稿で扱う事柄ではないようだ。

第一の理由から派生する第二の理由は、そしてこれが本稿をとおして見ていくテーマとなるのだが、相沢と豊太郎との関係ははじめてから対等ではなかった、つまり相沢は友人たる豊太郎を対等な同性と見なしていなかったというものである。ただ、豊太郎にとっても相沢との甘えた関係は実はそう悪いものではなく、「一点の彼を憎むころ」は甘えのあらわれとも取れる。

その意味で、『舞姫』がかつて漱石の『ころ』(1914)と並んで高校教科書の定番教材となっていたのは、なかなかバランスの取れた選択であった。漱石においては、『舞姫』とは反対に、対等でありたい・互いに影響を与えあいたいという意識がゆえに生じてくる、男同士の関係の危機が描かれている。鷗外が法学部的国家エリート、漱石が文学部的文人エリートを描いているところも対照的であるが、同じ大学・学部に学んだ友人同士というのは共

通しているだろう。のちに触れるが、これは重要な点である。この両作品から高等教育の世界というものを取り去ることはできない。

「太田は弱し」¹⁾と「良友」は言う。太田豊太郎は、多くの『舞姫』論で非難されているように、ある種の性格上の弱さをもっており、相沢は、豊太郎が自分より優れていると喜んで認めたうえで、とりわけ豊太郎の文学的才能を高く評価したうえで、しかし、にもかかわらず、あるいはそれゆえに、つねに保護者の立場を取ることができる。これは、芸術家の伝記などでも案外よく観察されることなのかもしれない。つまり、芸術的才能あふれる生活無能力者や繊細さゆえに人格的脆弱をも抱えてしまう人間に献身する保護者がほとんど奇跡のように登場してくれるという現象である。石橋忍月との「舞姫論争」において、鷗外がわざわざ相沢謙吉の名で論戦に応じ、この保護者をして豊太郎擁護の弁を張らせているのもたんなるお遊び的趣向ではないようだ。

相沢は、守ってやらねばならない弱い友人が「所謂事業家にあらずして、空想に富たる畸人なること」²⁾を強調する。初出雑誌では、「事業家」に「タートメンシュ」とドイツ語の説明がついており分かりやすいのだが、たしかに豊太郎は Tatmensch、すなわち行動する人間でなく、相沢に動かされなければ動かないし、妊娠させた西洋女を捨てるという、日本男児初の快挙も「常ならざる脳髓」のときに、なんとなく達成されてしまう。エリスの「ユングフロイリヒカイト〔処女性〕」³⁾を奪うのは、ひとり息子の立身出世のめを楽しみにしていた最愛の母の死を知らされて茫然自失状態にあったときだったし、そのエリスを捨ててしまうときは、すでに述べたように、高熱にうなされて意識を失っている。

ここで突然思い起こされるのが、ゲーテの『ファウスト』、いやメフィストである。「良友」相沢謙吉は、相棒にたいする指導力と（相沢の場合は無意識の）悪意に貫かれた保護者的態度という点で、この悪魔にどこか似てはいないか。とりわけ、メフィストが、妊娠した貧しい少女との関係を忘れさせてしまうために、ファウストをヴァルブルギスの乱交に誘いだすことは、

相沢謙吉が、豊太郎をエリスから引きはなすために、華やかなロシア宮廷に連れだすことと対応しているように感じられるのだ。そもそも「タートメンシュ」でない年老いたファウスト教授を「突っついたり押したりして動かしている」(343行)のはメフィストである。

もとより比較文学的論証を云々ではしないが(とりあえず『ファウスト』の本邦初完訳は鷗外の仕事であるが)、ここで提示したいのは、対等のように見える若い男性の友人関係において、実は一方の男性がメフィストのような人物になっているということである。問題となるのは、主人公を自在に引きまわす脇役の優越性、そして他者の影響を受けやすい主人公の受動性である。なにしろ、悪魔は洞察においても経験においても(そして何と言っても女へのクールな態度で)人間の男性に圧倒的に優っている。余談めくが『三四郎』(1908)に登場する与次郎は、メフィストのお道化た陰謀家として出自を、生真面目な相沢謙吉などよりも生きいきと発揮しているように見える。与次郎は主人公の鼻づらを引きまわし、三四郎もまた、そうされながら与次郎との対等でない関係に安心しきっている(実際、美禰子なんかよりも与次郎のほうがよほど謎めいているのに)。

ところで、われわれには、相沢と豊太郎、与次郎と三四郎、あるいはKと先生は本来は対等なのだ、という考えがある。これはどこから来るのだろうか。

すでに述べておいたように、漱石・鷗外の描く男同士の関係は高等教育と分かちがたく結びついている。対等な若者たち、というより、対等であることを相互承認しがっている青年たちを作りだしたのが、たとえば漢学の場合であり、蘭学や英学の場合であり、藩校や昌平坂学問所であり、そしてとりわけ近代の上級学校であった。男の友情と呼ばれるものはつねに排除と選別の上に、つまりどのようなかたちかは別問題として、自分たちは同じくらいスゴイのだという相互承認の上に成立する(と信じられたがっている)。ヤクザ同士の友情だってそうだろう。近代日本において個人の知的能力に基づく排除と選別の機能をもっぱらに担ったのが上級学校であり、それは、そこに

入ることができた青年たちを対等なものとして再配置する機関であった。『舞姫』や『こゝろ』のような、東京帝国大学の匂いをぶんぶんさせている作品は現代日本の教育の建前にはかならずしもふさわしくない（ひょっとすると、だから教科書から外されはじめているのか）。

さて、この上級学校と男の友情という結合が出たところで、ようやく、表題にあるドイツ学校物語が浮上することになる。というのは、まだドイツ文学が文化的意味を我が国でもちえていた大昔の著書の題名を借りて言う『マン・ヘッセ・カロッサ』（1947年高橋義孝著）を中心として、戦前戦中期の日本に輸入されたドイツ学校小説、1900年前後つまり漱石・鷗外とほぼ同時期に書かれたこれらの作品群が、はるか極東の読者をも魅きつけた第一の要素は、青春の友情だったからである。学校における男同士のロマンチックフレンドシップが日本におけるドイツ文学受容、こう言ってよければ教養主義的ドイツ文学受容と特権的な結びつきをもっていたことは、ヘッセの小説の受容を思い浮かべれば、とりあえず説明抜きですぐに納得してもらえだろう。ドイツ本国において以上に、友情は決定的な役割を演じてしまった。そしてそのことと、すでに述べた近代日本の上級学校の機能が突出していたこととは深く関わっているわけで、ひいては日本におけるドイツ文学受容の盛衰の理由につながっていく。

しかし先取りして言えば、これからここで取りあげようというのだから、もちろんドイツ学校物語における「友情」もまた対等な男と男の関係ではなかった、いや、これこそ対等でない関係の代表であったかもしれない。

若い男たちが対等になりうる上級学校のような場所が設定されてはじめて、対等なはずの関係がさまざまなかたちで実はそうではないことに、あるいは、にもかかわらず対等であろうとしてしまう危うさに、ひとは気づくのではないだろうか。上級学校が定着している現在から見れば想像しにくいことだが、同年齢層、同性、そして同階級（にならんとする）の若者たちが大勢集められる場所なぞ、上級学校が成立するまで存在しえなかった。学校友だちという形姿は、文学のなかでは新しいものである。日本を含む近代産業社会にお

いて急激に上級学校の数が増えていく1900年前後になってはじめて、上級学校を顕在的・潜在的舞台とする文学が登場してくるわけだが、この舞台では、青春期における男と男との対等な関係の讃歌と、しかし同時に、対等ではないとはどういうことかが、思いがけず残酷に提示されることになるのである。

そしてドイツ学校物語における青年同士の非対称的關係は、まずは作品のテーマ自体からやってくる必然であった。

我が国で最もよく知られたドイツ学校小説である『車輪の下』(1906)をその典型とする学校物語、つまり学校教育に押しつぶされていく生徒を描く作品は、当然ながら、上級学校の教育システムを告発するものであり、その面だけを見ると現在ではすでにかなり時代遅れかつ凡庸な内容になってしまったと言わざるをえない。

『車輪の下』がそうであるように、脇役の学校友だちは、いわゆる才能のある不良生徒（これも古びてしまったが）であり、あくまで優位に立って、「事業家」でない受動的な主人公を動かしていく。

この友人は、学校的な秩序の馬鹿らしさをあばき、ブルジョア道徳やキリスト教の枠におさまらない世界を開示する存在である。いっぽう、いままで鬱々と、あるいはボンヤリとそうした秩序にうずくまっていた主人公は、その毒に刺激され引っぱりまわされ、しかし彼のほうには毒に耐えきれるほどの勁さがないために没落する。ここでは話を『車輪の下』に絞るが（日本でよく知られている作品だからというわけではなく、親友の悪魔性が最も明確にあらわれているからである）、そうした気弱な友人を破滅させてしまう親友には、学校物語の嚆矢たる『春のめざめ』(1891)のメルヒオール（ただし彼のほうが主人公である）、当時はドイツで最も読まれた学校小説であった『死神』(1902)のカール・ノートヴァンク、『ブッデンブローック家の人びと』(1901)のカイ・メルンも属するだろう。「つねに悪を望みながら、かえってつねに善をなしてしまう」(1336行)メフィスト、つまり神様の愛弟子とはちょうど反対に、相棒を救ってやろうとして破滅に加担してしまう親友は、悪魔より悪魔的なのである。

『車輪の下』の主な舞台となるエリート神学校の寄宿舎のなかで、ヘルマン・ハイルナーはふてくされている。彼には詩人としての誇りがあるが、「^{シュートレーバー}がり勉」ばかりの同級生たちのなかには自分の才能を理解してくれるような生徒が見つからないのだ。ハイルナーは選抜試験の作文を見事な詩文で綴ったと噂になっており、あいつはちょっとスゴイ奴なんだと思われている、いや思われたがっていると言ったほうがいい。入試を詩で片付けたという噂は教師の口から漏れたとは考えにくいので、ハイルナーじしんが吹聴しているのではないのか。親元を離れた淋しい寄宿舎生活は親友ペアを次々と作っていくが、「自分と同じように天才的な（kongenial）友人を探し求めている」⁴⁾ 詩人は当然、名誉ある孤立を選ばざるをえない。ところが、みなが驚いたことには、そのハイルナーが、われわれの主人公ハンス・ギーベンラートとくっついたのである。ハンスこそ「がり勉」中の「がり勉」と思われていた。

ハンスにも友人ができなかったが、ハンスの場合は彼が動かなかったせいである。「内気な少女のように、彼はじっと座って待っていた。誰か男が自分を連れにきてくれないか、自分より強くて勇気ある男が自分をひっさらせて、いやおうなしに幸せにしてくれないかと」⁵⁾。この時点ですでに、ふたりの対等でない関係と、ハイルナーの引っぱり役は決まっていたのである。

不釣り合いなペアもあったが、そのなかでも最も不釣り合いな（ungleich）ペアと見なされたのはヘルマン・ハイルナーとハンス・ギーベンラートだった。なにしろ放埒者と几帳面、詩人とがり勉のペアである。たしかに、ふたりとも頭も良くて才能もある生徒に数えられていたが、ハイルナーが、半分くらいは嘲りの意味も込めてとはいえ天才などという評判をとっていたのにたいし、もうひとりのほうは、模範少年だと腐されていた⁶⁾。

この引用の口調からも分かるように、ふたりの性質は同じ（gleich）でな

いだけでなく、対等（gleich）でもなく、勉学第一の神学校のくせして、なぜか話者もしくは寄宿舎の仲間たちは「模範少年」よりも天才肌の「詩人」のほうを上部に位置づけているらしい。しかも「模範少年」じしんがその序列を内面化していくのである。

ハンスは、自分にとっては聖典に等しいような教科書をハイルナーがいたずら書きで汚しているのを見て、「たしかに犯罪的だけれども、何か英雄的でもある行為」⁷⁾ のように感じる。詩人の気まぐれな憂鬱は「罪もないハンスに注ぎこまれ」「圧迫し苦しめた」⁸⁾ が、それでもハイルナーの無頼ぶりが「模範少年」を魅きつけていた。しかしハイルナーが、ある事件をきっかけにいよいよ不良生徒の烙印をおされ、教師が彼との付き合いをよく思わなくなったとき、周囲の目を気にするハンスは親友を見捨ててしまう。見捨てられた詩人は、もちろんハンスを手ひどく傷つける言葉を投げかけずにはいられない。「君は卑しい臆病者さ、ギーベンラート、くそったれめ！」⁹⁾

結局、ハンスはハイルナーに、君を失うよりも「ビリになったほうがましだ」¹⁰⁾ と謝罪し、再びふたりは堅い堅い友情で結ばれるが、それに伴いハンスの成績が急激に落ちてゆく。「ハンスは、それが一部にはこの友情のせいだと知っていたけれども、友情のなかに損失や障害を見るより、むしろ、いままでなおざりにしてきたすべてのものを償う宝を見いだした」¹¹⁾ というわけなのである。実際、ハイルナーは、ヘブライ語ギリシャ語ができてても無味乾燥な文法家にすぎなかった（と卑下する）ハンスに新しい詩的な世界を示してみせもした。

これが素晴らしい友情であろうことはひとまず措いておいて、あえて教師の立場から見るならば、ふたりを引きはなそうとするのは当然であろう。というのは、教師は天才肌のハイルナーの無責任な残酷さを見抜いているからである。そもそもハイルナーは、時おりおかしい憂鬱症にさえおちいらなければ、「おぎなりに勉強して、必要最小限のことだけをすばやく無理やりに覚えこんでしまう」¹²⁾ 調子の良さを身につけているので、授業も試験も先生の言いつけも適当にやり過ごしているが、そんな芸当はできないハンスに

は、詩人気取りの生活態度に合わせることは、ハイルナーの想像以上に大きな負担になってしまう。この対等でない関係においては、影響を与えるのはいつもハイルナーだけなのである。われわれは、ハンスの変化が大きいために、ハイルナーが友情生活のなかで何一つ変化しないことを見落としがちである。みなが目していた、ハンスの成績の悪化や気力の衰退も、「もともと学校のことなぞどうでもいいと思っているハイルナーだけが気づかなかった」¹³⁾。

ついに神学校を脱走したハイルナーはそのまま放校となる。教師のなかには、ハンスが親友の脱走の事情を知っていたのではないかと白い目で見える者もいたが、ハンスにとって何よりも辛いのは、ハイルナーに何も知らされないまま取り残されたこと、手紙一本もらえなかったことだった。ますます無気力になって成績低下を続けるハンスに向かって教師から投げつけられる言葉、「どうして、君もご立派な親友と一緒に出ていかなかったのかね」¹⁴⁾ という冷笑がハンスの最も痛い所を突いてくる。つまりハンスは、中途半端なところであさり見捨てられたのだ。よく知られているように、神経衰弱となったハンスは退学を余儀なくされ、やがて川で溺れ死ぬ。

このように見ていくと、やはり我が国でそこそこの人気を保つヘッセ作品である『デーミアン』(1919)が、これがいわゆる発展小説・成長物語の流れを汲む作品で、主人公が破滅してしまうような学校小説とは正反対のものであるにもかかわらず、『車輪の下』とよく似ていることが分かる。『デーミアン』は、簡単に言えば、主人公エーミール・シンクレアが学校友だちのデーミアンによってよろしく指導されて成長し、ブルジョア社会や上級学校を突き抜けたどこか高次の世界、新しい共同体へと入ってゆく物語である。主人公とデーミアンとの関係も、だからもちろん対等なものではないが、ただデーミアンのほうは主人公を見捨てず、最後の最後まで引っばっていく。最後にエーミールは、「僕の友人であり指導者 (Führer) である彼にそっくりな僕自身」¹⁵⁾ を見いだすにいたるのである。もっともこれは、第一次大戦で瀕死の重傷を負った主人公の、遺稿となるかもしれぬ手記に出てくる最後の言葉

であり、デーミアンはどうやら戦死したらしいのだが。

旧制一高ドイツ語教師であった竹山道雄によると、『デーミアン』（邦訳岩波文庫1939年）はとくに一高生に人気があり¹⁶⁾、またアメリカ人歴史学者ローデンの旧制高校研究書では、どこの高校寄宿寮の話かはっきりしないが、寮生たちが『デーミアン』を暗誦しつつ、寮雨と呼ばれた集団放尿をするエピソードが紹介されている¹⁷⁾。最近ではなぜか田口ランディがこの作品を高く評価しているそうだし、『1999年の夏休み』（1988）という学校物語（原作はドイツの寄宿舎を舞台とした少女漫画『トーマの心臓』）である邦画でも重要な役割を演じているが、いずれにしろ『デーミアン』は、当時のドイツの文脈から切り離されて（別に非難の言葉ではない）、よく使われる表現で言えば自分探しの物語として我が国で受け入れられたものと思われる。『デーミアン』の受容層の変化は、自分探しの大衆化、あるいは女性による独占を示しているのかもしれない。

文学史的に言えば、『デーミアン』は、第一次大戦時に若者であった世代、ドイツ青年運動世代でもあり学校小説流行を支えた世代でもあるのだが、この若い世代のブルジョア社会や上級学校教育にたいする反抗と古びたヨーロッパ世界の崩壊の予兆を描いて、敗戦後の混乱のなかで若者たちに熱狂的に迎えられた。ただし、こうした若者たちじしんがたいていブルジョア青年だったので、没落しつつあるブルジョア階級による自己批判であったと言える。この自己批判のゆくえについては、これもよく知られたことなので、ただ次の事実だけを述べておけばよいだろう。『デーミアン』の主人公の自分探し（時には変な宗教に凝って「オーム」¹⁸⁾を唱えたりする）のキーワードは、すでに述べたように、正しいFührer 選びであるが、フューラーとは、ワンダーフォーゲルのさい先頭を歩く青年であり、のちにヒトラーに与えられる、日本語では総統と訳される称号であった。『デーミアン』という書物の曖昧さと危険は、夙に指摘されているところである。

デーミアンはまさにデーモンから来た名前である。転校生のデーミアンには、あらゆる反ブルジョア道徳的・反キリスト教的な噂がささやかれた。教

会に行かず、ひょっとしたらユダヤ人かモスレムかもしれない、あいつと喧嘩をした生徒はしばらく意識不明になったそうだし、彼はもう女を知っている、いや母一人子一人の母親と怪しい関係らしい、おまけにその未亡人がとてつもない金持ちなのだ……。実際、主人公がこの悪魔によって導きいれられようとする世界は、誰もが耐えられる世界ではない、ただ「カインのしるし」¹⁹⁾（これもキーワード）をつけた特権的な強者だけだ、ということなのである。

自分はどこか変である、あるいは変でありたい、いままでの大人とは違うのだという自意識と、上級学校的なものや家庭と言われるものに代表されるような既成の秩序や世間的価値の否定は、たしかに思春期や青年期に特徴的であろう。たいていの人間は、こうした青春の自意識過剰をやがては恥じるものだが、ともかくこの百年で、大衆文学も含めて（大衆文学でこそ）いやと言うほど書かれてきたテーマである。

しかし『デーミアン』における自己特権視の背後にあるのは、我が国では、とくに第二次大戦後の我が国では理解されにくい、階級差、階級的思い上がり、西洋ブルジョア（白人）の余裕、あるいは、西洋的啓蒙精神から超絶した芸術家の過大評価というか、そのようなものである。デーミアンは最後までわけの分からない人物で、いったい何をして食っているのかも不明なのだが、彼についてただ一つははっきりしているのは、生活や将来のことを心配しない、あるいは心配しないでよいということなのだ。彼は、心安らかにこの中心的世界からの、すなわち西洋ブルジョア社会からの脱落を指導できる。それは、何回か小規模の話になっているとはいえ、たとえば日本の全共闘運動が「もっぱら大学に限られた現象」であり、恵まれた東大生たちの「甘え」であり、「各種学校なんて学校側と衝突することもできない」と批判されたことと似ているかもしれない²⁰⁾。だから、これは凡庸すぎる指摘ではあるが、確認しておくくらいは許されるだろう。

世紀転換期に書かれたドイツ学校物語におけるメフィスト的親友は、多かれ少なかれデーミアンの自由、特権的な「カインのしるし」を有しているが、体制の論理からきっぱりと離れて自由になれるかどうか、たんに性格や才

能によってのみ決まるわけではないことを示したのは、しかし『車輪の下』だけだった。ハイルナーとハンスの関係を対等にしないものは、才能の有無や性格の強弱ということ以前に、立場の相違のなかにあるからである。『車輪の下』が日本人の心に、ふがいないハンスへの共感とも近親憎悪ともつかぬ思いとともに入りこんできたのは、そのせいではなかったか。

ハンスは神学校の受験のときに、都会から来た生意気な受験生と知りあい、官費で学べる神学校に落ちてギムナジウムには行くんだと訊かれて、悲しく惨めな気持ちにさせられるが、「シュバルツバルトの良い家の出身」²¹⁾であるハイルナーは、この無神経な質問者と同じ立場にいると思われる。だがハンスはチーズ屋の小僧や機械工（実際、退学になったハンスは機械工見習になる）にされないために、上級学校の秩序にしがみついていたのではない。ハイルナーの誇らしげな逸脱を横目で見ながら、ハンスはうずくまっている。

……ハンスの理想は、ひたすら勉強に邁進し試験で好成績をあげ、世間でひとかどの役を演じる人物となることであって、ロマンチックで危険な役を引きうけることではなかった。それでハンスはびくびくしながら自分の隅っこにじっと動かずにいた²²⁾。

にもかかわらず身の程知らずに増長してしまった「がり勉」に必要なだったのは、「良友」相沢謙吉だったのである。

兄貴を友にもてば

太田豊太郎の遠い後輩たる旧制高校生たちに、それにいつも西洋ブルジョア文化のほうに顔を向けていた彼らに、はたしてデーミアンはふさわしかったかどうか。もっともローデンが旧制高校生の蜚行と『デーミアン』を結びつけたのは、どこかの旧制高校の思い出記から取ってきたのではなく、ひょっとするとローデンじしんの思いつきで、『デーミアン』の名が旧制高校のイ

メージを、予備知識のない欧米人に伝えるのに役立つと考えたからかもしれない。だが、われわれは『デーミアン』の世界が近代日本のエリートたちの心情とは、ずれていることを知っている。偽善的道德や小市民的煩いを吹きとばそうとする旧制高校生の、蛮カラと呼ばれる諸風習や逸脱が、本当にこの世界から降りようとするものではなく、自分たちはこの世界の中枢にいるのだ、やがては中枢へと入っていくのだという安心と自信に支えられたかえって体制肯定的行為であったことを、旧制高校生じしんだって承知していなかったわけではなかろう。この問題はのちの左翼運動とも無関係ではなかった。

階級社会である欧米と違って日本では受験機会が平等に与えられていたが、だからといって下層からの高等教育への参入が容易だったのではない。社会学的研究は、旧制高校生の出身階層が大正中期以降、新中間層（中流家庭）で占められるようになったことを教えてくれるだろう。いっぽう、ドイツやイギリスでは上級学校とブルジョア階級との結びつきはもっとあからさまであったが、しかし、それは上級学校に下の階層の者もぐりこめなかったことを意味しているのではない。とにかく、旧制高校は、言われるほど階層開放的ではなく、西洋の上級学校は、言われるほど階層閉鎖的ではなかったことが、現在では指摘されている²³⁾。

したがって、西洋との違いという点で問題となるのは、学歴エリートたちの出身階層そのものではなく、日本の場合、それがどんな分布になろうとも、上級学校内では一旦消去されたということである。それにたいして、西洋では、上級学校内にまで、あるいは上級学校内にこそ、階級の相違がもちこまれた²⁴⁾。しばしば指摘されるように、西洋の上級学校文化はブルジョア階級の文化を核として構成されているが、旧制高校文化は言わば隔離地帯のオリジナルなものだったからである。

脱小市民を称揚する旧制高校文化は階層差を覆いかくし、男と男との対等な友人関係を構築する。平等な試験制度に支えられた旧制高校入学は同じスタートラインに立ったという対等意識を生徒たちに強烈に植えこんだにちがいない。素直に見れば、日本の旧制高校文化は完璧な友愛文化であると言え

るだろう。いや、多くの旧制高校懐旧談が伝えてくれるように、じじつそうなのだ。まことに旧制高校は、男同士の「対等」が尊重される（実現される、と言っているのではない）稀有な空間だったのである。ことによるとこの美点か、旧制高校文化がそのエリート性や超俗ぶりにもかかわらず、あるいはまさにそれゆえにか、大衆の想像力の範囲内にちんまりおさまってしまう一因なのかもしれない。

ただし、隠蔽ゆえに成立するこの対等な関係が、下層から上級学校にもぐりこんだ青年に、より残酷な孤独感を強いる場面を用意することにもなり、かえて、対等ではない関係のきわめて日本的な、そして興味深い特徴を提示する。たとえば高見順（1927年一高入学）の自伝的短編『私生児』の語り手は、祖母と未婚の母と自分から成る家庭の現実から逃れるように、男の砦たる一高の寮に逃げこむ。しかし彼にとってより辛いのは自分の悲惨さが隠されていることなのである。

——私は白線をまいた帽子〔一高生の帽子〕をひつつかむと戸外に飛び出し、寮に帰った。寮の友人に、酒を飲ませてくれとせがみ、その晩、それはもうベロンベロンに酔って暴れ、良家の出である富裕な友人達は実に凛々たる痛快男児と私を呼び拍手喝采してやまなかった。

高見順には、一高の左翼運動家たちの虚無と欺瞞を扱った『故旧忘れ得べき』という作品があるが、そこでも、出自のために対等意識をもてない屈辱感が主人公の特徴となっている。貧しい母子家庭に育った気弱な主人公は、裕福な家庭出身の活動家同志たちにたいして、表面にはあらわせないコンプレックスを抱いている。左翼活動と女遊びのせいで放校になる、自称ダダイストの友人にたいして、主人公は「あれは金持の倅なればこそできることだ」と感じる。

だってそうじゃないか、僕らは放校にでもなってみろ、もうすべては

おしまいだ、けれども友成には金力がある、その金力でいくらでも打開できる、その安心があればこそ向こう見ずなこともやれるというものだ、人は彼を果敢とし僕ごときを因循とするだろう、それは短見者流の考えさ、だってそうじゃないか、僕にだって将来扶養しなければならない母親などのかわりに一生或はなんにもしないだって食ってゆける財産でもあって見ろ、実に僕は無責任になれる、すなわち勇猛猪突も敢えて出来る、僕の愚図は性質の問題ではなく、金の問題だ、ああ僕も金持に生まれてくればよかったなあ云々。

こうした言説がドイツ学校物語では、むしろ登場してこない。それは、あくまで中産階級の自己批判の物語だったのである。その例外としての『車輪の下』と、その典型としての『デーミアン』がともに日本に受け入れられたのは興味深い現象であろう。

このような階級差以外の、学校におけるもう一つの重要な差は年齢差であるが、昭和期の旧制高校では年齢差もまた、さほど大きな意味をもたなかったように感じられる。旧制高校生の年齢がすこし高かったせいで、大人になればどうせ一世代にくくられてしまうようなわずかな年齢差が学校内ですでに問題にならなくなっていたのかもしれない。

しかし上級学校の寄宿舎内で、年齢差のあるペアが一つの伝統となっていたとは、よく言われることである。いわゆる「硬派」の書生の振舞いとして知られる「稚児」を囲う慣習であり、この稚児制度、すなわち少年愛的な対等でない関係には年の差は付き物であった。終戦を挟んで旧制松本高校に在学した北杜夫の『どくとるマンボウ青春記』が描くものは、伝統的な（と信じこまれている）旧制高校生活のパロディともなっているのだが、そこではたとえば、われわれも伝統の Knabenliebe（少年愛）をせねばならぬと意気込んで、それぞれにお目当ての下級生を探してドイツ語の愛称までつけるということをけっこう真剣に行なったが、どうも氣勢が上がらず立ち消えになってしまったという経験が面白おかしく語られている。

この笑い話は、旧制高校文化全体のなかでは、年齢差のあるペアのもつ意味が小さかったことを伝えてくれるだろう。旧制高校文化において明治末期以降に主流でありつつける教養主義の拠って立つ基盤は、年齢差（と階級差）など越えてしまう知的な対等性なのである。旧制高校のなかの少年愛を描いたものとしてまず一番に思い浮かぶのは『草の花』（福永武彦）だが、教養主義的一高生の主人公が、美しい下級生にたいする「physique」な欲望を否定し、「靈的」な相互理解を主張するのは、痛々しいほどであろう。しかし対等を求める繊細さは少年愛にはそぐわない。

いっぽう、われわれが注目する時期のヨーロッパの上級学校では、年齢差によって作られる対等でない関係は、実生活でも文学作品においても重要な役割を果たしていたと言える。パブリック・スクールやドイツ幼年学校、またギムナジウムでも寄宿舎などで、年少者が年長者の保護者を得るという慣習が根をはっていたのは、これらの学校が6年制や9年制であり、思春期を含んで十代の最初から最後まで年齢差があったことにも因るのだろう。北杜夫のドイツ語混じりの思い出話からも分かるように、日本の上級学校、とりわけ幼年学校における保護制度（の残滓）は、明治初期の書生から受けつがれた純日本的あるいは薩摩藩的「硬派」の伝統と、こうしたヨーロッパの伝統が溶け合っていると考えられる。いままで触れないでいたが、デーミアンは主人公の上級生なので、学校における年齢差のあるペアの伝統をただしく受けついでいるわけである。

もちろん、自分を守ってくれるような上級生を獲得できる下級生は、なんらかの取柄を備えている生徒だろうし、上級生のほうも人気のある下級生を囲いこめるだけの力をもっていなければならなかった。だからこれは少数の特権的なペアなのだ。

ここで注目しておきたいのは、現実でもフィクションでも同性間の愛着と見なされがちな、年齢差のある対等でない生徒同士の関係が、男のほうが年上なのが普通である男女のペアにおける対等でない（ように見える）関係のコピーとなっていることである。不安定な同性関係が、男女の安定した（よ

うに見える) 関係, すなわちライバリティの存在しない関係をうまく模倣できるように, まずは年齢差が導入されていると考えられるのだ。要するに, より有力な人間の前ではひとはしばしば「女」になって取引関係を維持するということを, 若い生徒たちは, 取引関係の脱性を心がけた大人のブルジョア社会の場合とは違って, あからさまにあらわしてしまった。

ハンスとハイルナーのような同い年の, 対等ではないペアの場合でも, 「ハンスはより優しく暖かく夢見がちになり, ハイルナーはより力強く男らしくなった」²⁵⁾ というように, ふたりの結びつきのなかでハンスは徐々に女性化してゆくのである。また『デーミアン』の主人公も, 年上のデーミアンにいわば陵辱される夢のなかで自分が「恍惚と不安の入り混じったような感情」²⁶⁾ に満たされたことを告白している。

しかし, こうした女性化についてはすでに他の場所で論じたことがあるのでこれ以上は触れない²⁷⁾。というより, 先取りして言ってしまうと, ある意味では分かりやすい女性化現象よりも, 男性が男性にたいして自らを男性化する, あるいは男性化しなければならないという意識をもつことのほうが興味深いように, いまでは思われるのである(過度のジェンダー化志向は思春期の特徴かもしれぬ)。しかも, ここで男になるとは, これまた半ば滑稽譚のような『キタ・セクスアリス』(1909)の寄宿舎における稚児騒動とは違って²⁸⁾, 単純に性的なものだけを指しているのではない。

男になるのが難しいのは, 男には, 誰かに男にしてもらわなければ, なれないからである。デーミアンの摩訶不思議なカリスマ性は, 彼が誰にも依存しないで指導者であるところから, つまり彼のニーチェ的な個人主義から来ているが, しかし, 他の場合には, 指導者たる「男」になるのは, なかなか大変な作業なのである。実際『デーミアン』の主人公も, デーミアンに辿りつく前に, かつて指導者として慕っていた年上のオルガン奏者と彼の信奉する変てこな古代宗教にたいして, 恩知らずにも残酷にも, 指導者失格の宣告をしてしまう。そして下位の者から, こうされてしまえば, 指導者的立場はもう終わりなのである。

指導者こそ弟子に依存している！　そう言えば、相沢謙吉だって弟子の窮状を利用して、みずからの力を示そうとしているように見える。ドイツ学校物語における友人関係を、視点を逆転させて、指導者の危うい立場のほうから眺めてみたい。

まずは、ヘッセと並んで、ドイツ本国でよりも我が国で広く読まれた作家であったハンス・カロッサの学校小説『青春変転』（1928）を取りあげよう。カロッサの邦訳は現在では文庫本から一切姿を消してしまったが、1930年代から50年代にかけては、三種類もの邦訳全集が次々と出されるほどの人気を保っていた。カロッサはあっさり消えてしまったぶんだけ、速く過ぎ去った教養主義時代との結びつきを、ヘッセよりもさらに強く感じさせる。

カロッサの自伝的学校小説もまた主人公の成長物語であり、もちろん、指導者たる年上の友人も欠けてはいない。カロッサについては、ナチス政権の時にどっちつかずのズルイ態度に終始してしまったという過去のせいもあり、非難も好感も込めて、その穏やかで曖昧な在り様が指摘されるのがつねである。ここでも、年上の友人はごく普通の（つまりハイルナーのような詩人ではない）生徒であるし、「カインのしるし」なぞつけてはいない。これは最も重要な点なのだが、ブルジョア社会参入へのお手伝いという、本来の導き手の役割が保たれているわけである。しかし、にもかかわらず、カロッサのほうがヘッセなどよりよほど生々しく上級学校におけるペアの不安定な関係を描きこんでいるように見えるのだ。

『青春変転』の主人公ハンスはギムナジウムの寄宿舎に入った初日早々に、ふたりの上級生から「保護」（Schutz）の申し出を受ける。そのひとりが、一学年上級のフーゴであったが、フーゴは病弱な身体のために一年を棒にふり、本当は二学年上の生徒であった。きわめて小柄で弱々しい少年からの「保護」の申し出は、ハンスにとっては「ちょっと滑稽に聞こえた」し²⁹⁾、フーゴのほうでも一年落第を経験して、こうした学年差による上下関係を実はもはや重要視していなかった。結局フーゴはもう一年療養生活を余儀なくされて主人公と同じ学年になり、やがてふたりは「きみ」で呼びあう（この

寄宿舎では本来上級生には敬称を使う)親友同士になる。

しかし、そうでありながら、フーゴが年上の指導者として機能できるように、主人公は奇妙な芝居を思いつく。フーゴには妹がいて、ゆくゆくはその妹は主人公の妻になるという「お遊び」である。こうしてイルマと名づけられた架空の妹は、主人公と、未来の義兄たるフーゴを強く結びつけるのだが、これはまさに、ブルジョア社会におけるメール・ホモソーシャル関係を説明する教科書記述にもってこいの(したがってかえって恥ずかしくて使えない)設定と言えるだろう。漱石の小説などによく指摘される「妹の交換」による、つまり女を媒介とする男と男の絆の強化である。

フーゴは最初いやがっていたが、しかし後になっては僕の熱気に引きずられ、僕の遊びに加わるようになった。それはフーゴに、僕を支配する大きな権力を与え、フーゴはやがて気分次第で僕を幸福にしたり不幸にしたりした。[……] フーゴは年長者として、僕の学業の向上をすこし監督しなくてはいけないと感じていたので、僕に関心をもってきた妹というイメージを膨らますことによって、僕の勉強心を駆りたてた。成功も失敗もすべて逐一イルマに報告され、同じようにきちんと僕にはイルマの称賛や心痛が伝えられた。かくして僕は、まだ一度も見たことのない恋人の信望を得んがために最善を尽くしたのである³⁰⁾。

そして、この架空の妹が完全に消えてしまうきっかけになったのも、年齢差のあるペアにまつわる事件だった。寄宿舎で仮装パーティが開かれたカーニバルの晩、主人公は、美しく装った下級生に魅了される。「上級生下級生の区別がなくなる」無礼講のなかで、下級生が「少女のまなざし」で主人公に笑いかけながら、道化の杓で肩をたたいたとき、主人公はいっぺんに恋の魔法にかかってしまったのだ。しかし、その下級生には有力な最上級生の保護者がいた。反乱軍の騎士の仮装で登場した上級生が少年を連れさってゆく。

「怠慢なる我が小姓はどこにおる」

ためらいがちに、そして頬を赤くそめて少年は僕を見やると立ちあがり、屈強な上級生に従った。上級生は、向こうに行きながら目を細めて僕をじっとにらんだ。〔……〕それでも、上級生のためにこの僕が捨てられてしまったのだという思いにさいなまれはじめた。ふたりが親しそうに話しながら出ていったとき、さも軽蔑したように僕のほうをふりかえって笑ったような気がしたのである³¹⁾。

主人公は、そこらにあった酒を集めて飲みほし、したたかに酔ってフーゴに絡む。フーゴの口から出る、下級生についての悪い噂も主人公の燃えたつ心を静めることはできなかった。

「イルマはなんて言うだろう」——フーゴがとうとう口にしてしまった言葉はこれだけだった。けれども、色褪せた半分でっち上げられた偶像をこんなふう呼び出すことぐらい、あの時の僕をなだめるのに適していないものはなかったのだ。イルマの話を本気にとることなどできなかったが、それでもずいぶん心にこたえた。ああ、フーゴがこれさえ口に出さなかったら、僕だって素直になれただろうに。〔……〕僕は大きな声で怒鳴った、イルマなんか一度も見たことないじゃないか、ほんとにいるかどうか、君が僕を奴隷にしようと思って、でっち上げたかどうか、分からないじゃないか、なのにイルマばかりを慕っていろなんて、あんまりだ、もうどうでもいいよ、正直言ってしまうと、イルマなんか大嫌いだ。この破廉恥な離反に驚いて、友はわっとばかりに泣きだした。思いもしなかった友の涙を見て、僕のほうも完全に自制心を失い、僕たちは抱きあってわあわあ泣いた。この光景に、他の寄宿生たちが上級生も下級生も大喜びした。僕たちが酔っ払ってふざけているとでも思ったのだ。当の僕たちといえば、酒で頭がぼんやりとしていながら、何かかけがえのない大切なものが、とどめようもなく失われてしまったと感じていたのだ³²⁾。

このあと主人公は、くだんの美少年が引き起こした同性愛事件に無実のまま巻きこまれて危うく退学になりかけるのだが、それこそ予定調和的に救われて学校に戻る。これに懲りたフーゴは寄宿舎を出ることをすすめて、ふたりとも別々に下宿をし、やがてもうひとり能天気な同級生が加わって三人グループとなり、主人公とフーゴは距離を保った大人の付き合いができる友人関係になる。カロッサらしい決着といえ、そうかもしれない。

このように見ていくと、学校を舞台とする物語が、対等でない青年ふたりの関係にどのような決着がつくか、をめぐる話のように思えてくる（そう言えば漱石にもあてはまる）。

ローベルト・ムージルの幼年学校小説『寄宿生テルレスの惑い』（1906）も、その一つではないのか。これは、あの『特性のない男』の作者の処女作だということと、そしてしばしば取りあげられるエディプス的三角形の解釈図式をとりあえず棚上げしておけば、テルレスとバイネベルク、バジーニとライティングという、幼年学校生たちの対等でない関係をめぐる話と見ることもできるのではないか。「マン・ヘッセ・カロッサ」の日本的教養主義ラインから（運よく）外されたムージルではあるが、ドイツ学校小説の正道を踏みはずしてはいないわけである。

ここではバイネベルクとライティングが18歳、バジーニが17歳、主人公テルレスが16歳というように年齢差が細かく定められており、彼らのあいだには、幼年学校寄宿舎の伝統にのっとり、年少者による奉仕（*dienen*）と年長者による保護（*beschützen*）の関係が存在する。小説の冒頭近くで、宮廷顧問官であるテルレスの父は、自分に代わって息子にブルジョアの男らしさを教えこんでくれる（と父が信じている）バイネベルク男爵に、寄宿舎生活での息子の保護を頼む。ひとり息子は「この後見の願い出に不機嫌そうに顔をしかめたが、バイネベルクのほうは自尊心をくすぐられて、テルレスの困惑をすこし楽しむようにニヤニヤ笑った」³³⁾。主人公の「惑い」からではなく、この最初は薄笑いを浮かべている脇役の立場から全体を見るならば、これは、寄宿舎学校における保護者、あるいは擬似父の失墜の物語なのであ

る。

バジーニの起こした盗難事件をきっかけとして、しかし、それなりにバランス（アンバランス？）が取れていた非対称の関係がゆがみはじめる。奉仕と保護の取引は、少女のように美しいが何もかもに劣っており、そのうえ金を盗んだことを教師に言いつけられたら困るという弱みまで握られたバジーニにとって、自分を守る唯一の方策となったのだ。ライティングとバイネベルクに「屈辱的な奉仕」³⁴⁾を提供するようになったバジーニは、小説の後半の話になるが、自分より年下のテルレスをもそこに引きこもうとする。ふたりに虐待されているバジーニは、テルレスを利用して自分の立場を有利にするしかない。ひと気のない共同寝室でバジーニはテルレスを誘惑する。

……バジーニは次の瞬間には素早く肌着を脱ぎ捨てると、毛布のなかにするりと入ってきて、震える裸体をテルレスに押しつけてきた。

テルレスはこの襲撃に気づくやいなや、バジーニを突きはなそうとした。

「何する……」

しかしバジーニは乞うような声を出した。「おい、またそんなふうにするなよ。みんな君のようではないぜ、みんなは君みたいに僕のことを軽蔑しない、あとで違うふうにできるように軽蔑するふりをしているだけだよ。で、君ならどうする……僕たちはあいつら〔バイネベルクとライティング〕より年下だし、君なんか、たしかに僕より強いけど、僕よりも年下だし……あいつらと違って乱暴でも自慢屋でもない……優しいだろ……君が好きだな」

「何を言う、何をしろっていうんだ、やめろ離れろ」

テルレスは苦しげに腕でバジーニの肩を押しかえした。しかし、他人の柔らかな肌が生暖かく迫ってきてテルレスを包みこみ、息を詰まらせた。バジーニのほうは絶え間なく、ささやき続けている。

「どうしてさ、ねえ……お願いだよ……君に奉仕（dienen）できたら、

楽しいのに」³⁵⁾

年下のふたりが内緒でこうした取引関係に入ってしまうのは、しかも年下のテルレスのほうが「奉仕」してもらおうというのは、年上のふたりにたいする陰謀であるし、バジーニは三人と平等に^{ジェニタル}性器的関係（同性愛ではない）をもつことで、「召使のような馴れなれしい厚かましき」³⁶⁾を発揮してかえて「男」たちを微妙に操るようにもなる。

テルレスはしばしばバジーニとこっそり会った。バイネベルクを通して知った〔寄宿舎建物内の〕隠れ場所の全部にバジーニを連れていったのだ。しかし、テルレスじしんは、そういう狭い抜け道を通るのが苦手だったから、じきにバジーニのほうが事情に通じて、先に立って歩く者（Führer）になってしまった。

夜になると嫉妬心にかかられて、バイネベルクとライティングを見張っていたので、心休まる暇がなかった³⁷⁾。

だが、こうした欲望の記述はむしろ思いがけず、テルレスとバジーニではなく、テルレスとバイネベルクのあいだの、ホモエロティックな闘争を映しだしてしまうのかもしれない。バイネベルクは、自分の一風変わった（と自負している）言説と男らしさに半分魅かれつつ、半分信じていない年下の友を、だからこそ隠れ場所の傍らにおいておくことを好んでいた。自分の支配力を確かめるためにバジーニを陵辱するように、バイネベルクはテルレスを知的にねじ伏せようとする。そうした年長の友の、ほとんど性的と言っているような熱情が、時にテルレスに屈辱と辟易感をもたらしていた。たとえば、生徒たちのマントが掛かったニッチに隠れてふたりが話しあうとき、

バイネベルクの熱い吐息が、マントの群れにからまり、この隅っこを熱くした。いつものことだったが、興奮したバイネベルクはテルレスを閉

口させた。ましていまはバイネベルクが身をずらして間近にきたので、彼の眼が二つの緑がかった石のようにテルレスの前に居座り、両手は奇妙に醜い敏捷さを見せて薄暗がりのなかであちこと動いていた³⁸⁾。

そもそもバジーニの奉仕が性によるものならばテルレスの奉仕は知の奉仕であった。テルレスは、年下でありながら「隠れた作戦本部長」³⁹⁾の役を務めていたのだ。「テルレスは彼らの保護（Schutz）を受けてずいぶん得をしたが、彼らのほうもテルレスの助言をあてにしていた。というのは、テルレスの頭がいちばんよく働いたからである」³⁹⁾。

もっとも、重要なのは、テルレスがこんな取引関係に、バジーニなどと違って一生懸命になれないことのほうだ。隠れ部屋やらバジーニ虐めやら、そして何より寄宿舎内の権力抗争に加わっていても、テルレスは、自分でもなぜか分からぬままに、どこか冷めており、年上の友人の若者らしい単純さと熱心さを滑稽にも感じている。

……テルレスは友人たちをからかってやりたいような気持ちになったが、それでもひょっとしたら彼らの空想にも、自分には窺いしれない真実が隠されているのかもしれぬという不安を捨てきれなかった。テルレスは自分がいわば二つの世界に引き裂かれているのを感じた。一つは、堅固なブルジョア世界で、両親の家で慣れ親しんできた、そのなかでは結局すべてが統率され、理性に基づいて進んでいくような世界であり、もう一つは、暗闇や秘密や血や予想もしなかった驚きに満ちみちた冒険の世界である³⁹⁾。

『デーミアン』の第一章の題名が「二つの世界」であるように、ここでも、ブルジョア少年としての奇妙な律義さとそれへの反発が拮抗している。そして、インドや神秘思想（またしても！）にやたら凝っているバイネベルクは、年少の友にたいして、自分が完全に西洋ブルジョア社会から離脱した決然た

る新しい人間であることを、事あるごとに示そうとする。「まあ君はどうせ、〔パパのように〕宮廷顧問官か、それとも詩人にでもなるんだろ。君にはこういう行動は必要ないし、それに怖がってもいるね。だけど僕は自分の人生をもっと違うふうに考えている」⁴⁰⁾。こうも言うバイネベルクはテルレスのパパの委託を裏切ろうとしているように見える。

ところで、いつも他の人間を気にするところに君の間違ひがある。つまり君には独立心が足らない。家に手紙を書くのだ、こういう事態におよんでパパとママのことを考えるのだって、どうかしているよ。だいたい親がわれわれについてこられるなんて、誰が君に言った。われわれは若い、一世代あとの人間だ。彼らが一生かかって夢想だにしなかった事どもが、われわれには開けている。僕はすくなくとも、僕のなかにそれを感じるけどね⁴¹⁾。

これは、まさしくデーミアン的（もしくはナチス的）言説なのだが、もちろんバイネベルクはデーミアンになれはしない。たとえばテルレスが興味をもった「虚数」について、神秘思想家たるバイネベルクは、意外にも、彼の最も軽蔑する一世代前の教師たちと同じような、そういう計算規則なのだからひとまず暗記しておけばよいといった正しすぎる答えしか返せない。「僕は、君ならこのこと〔虚数の不思議〕に興味をもってくれるにちがいないと思ったんだ。すぐに君のことを考えたよ、だって説明はつかないけれど、君のいつも言っている信念の証明になりそうじゃないか」⁴²⁾。

苛立ちながら口答へする年下の友人にたいして、バイネベルクは「眼をますます不安げに光らせながら」、「いまに君にも分かるよ」⁴³⁾と繰り返すだけだった。何か惑っているらしい（念のために強調しておけば本当の主題はこの「惑い」である）年少の友に自分を承認させ、尊敬させるために払うバイネベルクの努力は涙ぐましく、テルレスもそう感じてしまったように滑稽ですらある。バイネベルクから見れば、バジーニをめぐる事件は、奇妙に冷

たいところのある弟子と自分とのあいだの温度差を縮めるための絶好の機会であった。

ついにバイネベルクは、腐りきった（三人との性器的関係を利用して増長した）存在であるバジーニに催眠術をかけてその魂を完全にコントロールし浄化することを思いつく。すでにバジーニへの興味も欲望も失っていたテルレスは、例のごとく半分馬鹿ばかしいと思いつつ、最後の期待を抱いてしまう。しかし、バイネベルクがもち出してきたピストルにただもう怯えて催眠術にかかったふりをしていたバジーニの猿芝居が当然のことながら破綻したとき、年少の被保護者テルレスと、同等のライバルたるライティングの目の前で面目を潰されたバイネベルクは、怒り狂って少年を鞭で殴りつけることしかできない。

……テルレスには、いまやすべてが終わったと思われた。この光景は吐き気を催させた。何の考えもなければ、言葉も出てこない、在るのはただ静かな嫌悪感だけだ。

彼はそっと立ちあがると、そのまま何も言わずに去っていった、まったく機械的に。

バイネベルクはくたくたになりながら、なおもバジーニを叩きつづけていた⁴⁴⁾。

完全に離反しようとするテルレスにたいして、バジーニの同罪者としてクラスの私刑にかけてやると脅したバイネベルクの、皮肉を込めた捨て台詞は「そのときは、バジーニが君を保護してくれるかもしれないね」だった。ライティングは単純な乱暴者にすぎないが、「では、バイネベルクはどうだ。あいつはまるで何年も溜めこんできた憎しみのために震えているみたいに見えるな。それも僕の前で赤恥をかかされただけのことで」⁴⁵⁾

しかし、テルレスが突然寄宿舎を出奔したとき、バイネベルクらは脅しの効果に半ば驚き半ば喜び（もっともテルレスはまったく脅かされてなぞいな

かった)、ひょっとしたら屋根裏の隠れ部屋にうずくまっていなかったと捜しまわり、教師をうまく言いくるめて、テルレスが安心して学校に戻ってこられるようにすべてを整えておく。テルレスの父に言われたとおりの保護者の役割を演じてしまうのだ。だが、テルレスはあっさり学校を去ってゆく。

バイネベルクは、のちに作者によって、奴こそ第三帝国の独裁者たちの萌芽だったなどと言われてしまったために、たいそう評判が悪い。しかしこのように見てくると、称賛してもらいたかった年少の友に見捨てられた哀れな生徒として、彼にも多少のかわいげが出てくるような気がするのである。それとも、1942年に亡命先で死んだムージルは見届けられなかったが、Führer失格のこの哀れさが独裁者の特徴だとそもそも言いたかったのだろうか。

女を友にもてば（ただし短い付け足し）

こうした依存関係の逆転は、『テルレス』と同年に発表されている『車輪の下』のコンディにも観察される。「自分の話を聞いてスゴイなあと言ってくれる者」、「自分が学校や人生について革命的な話をすると、静かに喜んで耳を傾けてくれる者」を求めてしまうハイルナーは、バイネベルクそのものである。

人の好いギーベンラートは、彼の友人にとって、たんなる快い玩具、言ってみれば一種の飼い猫にすぎないように見えたかもしれない。ハンスじしんが時折そう感じていた。しかし、ハイルナーにはハンスが必要だったので愛着をもっていた。ハイルナーは心を打ち明けることのできる者、自分の話を聞いてスゴイなあと言ってくれる者が欲しかった。自分が学校や人生について革命的な話をすると、静かに喜んで耳を傾けてくれる者を必要としていた。それに、メランコリーに陥ったとき、そっと慰めてくれる人、膝に頭を寄せさせてくれる人も必要だった。こういう性質の者によくあるように、この若い詩人は、理由のない、少し人に

媚びたようなところのある憂鬱症の発作に悩んでいた。こうした憂鬱の原因は、一部には子供の魂からの静かな別れであり、一部にはさまざまな力や予感や欲情などの、いまだどこに目標を向けていいか分からないような奔流であり、一部には、男へと成熟してゆくときの、訳の分からない仄暗い圧迫であった。そういう時ハイルナーは、同情され、ちやほやされたいという病的なまでの欲求をもった。以前は母親にかわいがられた息子だったが、まだ女愛を受けるまでには成長していないいまは、従順な男友だちが彼にとって慰め役を務めてくれた⁴⁶⁾。

筆者は以前に同じ部分を引用しつつ、ハイルナーは「男の気まぐれや憂鬱や自尊心を受けとめてくれる都合のいい女」⁴⁷⁾を求めているにすぎないという言い方をしてしまったことがある。しかし考えてみれば、この程度のことで慰撫できる男がもしいたならば、むしろ女にとってこそ都合のいい男なのかもしれない。それに、あれほど男同士の友情を描いたと言われるヘッセが、慰め役を務められるのは結局女しかないとすっかり弱気になっているようにも読める。だが「従順な男友だち」が慰め役に徹しきれなかったように（当たり前だ）、女もまたそれほど利他にあふれているわけではあるまい。

トーニオ・クレーガーは、その鋭敏すぎる神経という不幸にもかかわらず、「慰め役を務めてくれる」女を、しかも女の「友」を得た、稀にみる幸福な男ではなかったろうか。

そもそも『トーニオ・クレーガー』（1903）は、友をめぐる物語である。

一緒に帰るという約束をやっと取りつけて胸をときめかせながら、学校友だちのハンス、金髪碧眼のこの美少年を、ギムナージウムの前で待っている十四歳のトーニオが冒頭にいるならば、最後の場面では、有名作家となった三十過ぎのトーニオが、「団子鼻と突き出た頬骨と小さな黒い光った眼を備え、ブルネットでスラブ風のひじょうに感じのいい顔」⁴⁸⁾をした（つまり美人でも金髪碧眼でも若くもない）女友だちに、旅先の北の国から手紙を書いている。性愛と切りはなせなかった男友だちから、性を含まない間柄である

女友だちへと、トーニオは動いてゆく。

女友だちへの手紙の内容にはもはや立ちいるまい。要するにトーニオは「二つの世界のあいだに立っている」⁴⁹⁾（またしても！）。例のブルジョア的堅実と芸術家的奔放のはざまに立ち、そのどちらにも属せない苦悩と自負といった、初期トーマス・マンの主題である。だからここで注目したいのは、内容ではなく、それが中年のロシア人画家リーザヴェータに向かって書かれているということである。

女友だちのリーザヴェータは、「自分の話を聞いてスゴいなあと言ってくれる者」ではなく、その点では、トーニオがかつて愛したハンスや金髪のインゲと同じである。トーニオは「スゴいなあと言ってくれる者」を、たとえば詩を書く少年トーニオにその昔秘かな思いを寄せていた黒い眼の少女をむしろ憎んでいたかもしれない。トーニオが陽気な碧眼族を愛していたのは、彼らがトーニオの詩なぞすこしも理解せず、もちろん尊敬もせず、不器用な文学少年なぞに鼻もひっかけない、正真正銘の健全なるブルジョア精神の持主だからだった。ハンスに片思いするトーニオ少年は、「最も多く愛する者は敗者であり、苦しまねばならぬ」⁵⁰⁾ という考えを心のなかで愛撫し、こういう対等でない関係から来る痛みと、そして何よりも喜びを繰り返しかえし繰り返しかえし、時には授業中にも嘔みしめていたのである。そもそもトーニオは、精神的に自分と決して対等になれないようなハンスの低俗さをこそ愛していた。

ある春の午後、文学仲間の男たちの喧しい集まりから離れ、ふらりとリーザヴェータの寂しいアトリエにやって来て、ふるまわれたロシア風紅茶をすすりながらトーニオが話す内容は、彼がのちの手紙のなかでみずからの運命として承認する「二つの世界のあいだ」をさまよう、ほとんどマゾヒストとしか思えないような芸術家の姿である。

しかし、この日のトーニオはもっと未練がましい。「額の上のしるし」⁵¹⁾（またしても！）をすでに幼いときから自覚し、学校時代はそのために小馬鹿にされていたが、いまではそれを芸術家の非凡な才能として称賛されなが

ら、だがトーニオのほうでは、「額の上のしるし」を特権視するこういう
「文学好き」^{ディレクタント}たちの尊敬のまなざしにうんざりしており、「精神なんか必要と
しない青い眼をもった」⁵²⁾ ブルジョアたちの能天気な人生に、いまでもじく
じく片思いしている、というわけなのだ。

話しつつけるトーニオに、ようやくリーザヴェータが答える。

「お話よく分かった、トーニオ、はじめから終わりまで全部。それで、
きょうの午後お話しになったこと全部にあてはまる答えをさしあげましょ
う。しかも、ひどく悩んでらっしゃる問題の解決でもある。さあ、いい、
解決はこう。そこに座ってるあなたは、あっさり言ってしまえば、ブル
ジョアなのよ」

「僕が？」とトーニオは問いかえし、いくぶん、へたり込むようなふう
だった。

「どう、凶星でしょ、そうでなくっちゃ。それなら、すこし減刑してあ
げる。減刑の余地はありなんだから。道に迷ったブルジョア、トーニオ・
クレーガー、あなたは迷子のブルジョアよ」

——しばし沈黙。とトーニオは思いきったように立ちあがり、帽子とス
テッキを取った。

「ありがとう、リーザヴェータ・イヴァノーヴナ、これで心慰められて
家に帰れます。僕は見事に片づけられました」⁵³⁾（イタリック原文）

もう一度繰りかえすが、芸術家とブルジョアの対立云々や、不遇な女流画
家の真の芸術家魂や「道に迷ったブルジョア」とはいったい何かということ
は取りあげない。そうではなくて、こんなやり取りがはたして同性間で可能
であろうか、と言いたいのである。さまざまなかたちで自己特権化しようと
する男を生産的に懲らしめることができるのは、ただこのような女だけ、つ
まり男にとって対等とか対等でないとか思案する必要がなく、且つかくも孤
独に自由な女だけなのである⁵⁴⁾。これは、トーニオとその作者が名高い（文

友だち尽くし

学的) 少年愛者であることと矛盾するわけではあるまい。

あるいは、この東方からやって来た黒い眼の女友だちは、トーニオじんのなかにいる、内なる「女」なのかもしれない。ちょうど「良友」が、「二つの世界のあいだ」に引き裂かれた我らが日本人・太田豊太郎の、内なる「男」であったように。

註

- 1) 「舞姫に就きて気取半之丞に与える書」(相沢謙吉)『鷗外全集第二十二巻』(岩波書店, 1973年) 163頁。
- 2) 同161頁。
- 3) 同162頁。
- 4) Hermann Hesse: *Unterm Rad*. Frankfurt a.M. (suhrkamp. st52) 1972, S.66.
- 5) Ebd., S.66.
- 6) Ebd., S.73.
- 7) Ebd., S.75.
- 8) Ebd., S.76.
- 9) Ebd., S.79.
- 10) Ebd., S.89.
- 11) Ebd., S.93f.
- 12) Ebd., S.94.
- 13) Ebd., S.104.
- 14) Ebd., S.107.
- 15) Hermann Hesse: *Demian. Die Geschichte von Emil Sinclairs Jugend*. Frankfurt a. M. (suhrkamp. st.206) 1977, S.163.
- 16) 竹山道雄「若い世代」『竹山道雄著作集1』(福武書店, 1983年) 290～298頁参照。
- 17) Donald Roden: *Schooldays in Imperial Japan. A Study in the Culture of a Student Elite*. Berkeley (University of California Press) 1980, p.11. 因みに, この本の邦訳題名が, 第一高等学校の寮歌から取られて『友の憂いに吾は泣く』(講談社)にされていることは, われわれにとって示唆的であろう。
- 18) *Demian*, S.120.
- 19) Ebd., S.32.
- 20) 小熊英二『＜民主＞と＜愛国＞ 戦後日本のナショナリズムと公共性』(新曜社, 2002年) 第13章「大衆社会とナショナリズム——一九六〇年代と全共闘」を参照されたい。カッコ内は小熊からの引用である。
- 21) *Unterem Rad*, S.61.
- 22) Ebd., S.79.
- 23) 竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』(中央公論新社, 1999年) 第三章「誰が学歴貴族になったか」の第二節「パブリック・スクールと旧制高校」, および保田卓・薄葉毅史・竹内洋「近代日本の学歴貴族の社会的出自と進路——第一高等学校入学者

- 調査表と同窓会名簿の分析から』『教育社会学研究』第65集（日本教育社会学会編、1999年）所収、を参照のこと。
- 24) 西洋の上級学校における階級格差の残酷さは、日本でも英文学研究の分野ではよく取りあげられている。奨学金を獲得することで下の階層からパブリック・スクールやグラマー・スクール、さらにオックスブリッジにもぐりこんだ「奨学金少年」は、学校で明確な差別をつきつけられ対等でない関係に傷つけられ、そのことが、たとえばD・H・ロレンスやジョージ・オーウェルなどの「奨学金少年」出身の作家の生き方や文学に影響を与えもしたのだという。これについては、大石俊一『奨学金少年 ジェントルマンとアンチ・ジェントルマンのはざままで』（英潮社新社、1987年）、小池滋『英国流立身出世と教育』（岩波書店、1992年）を参照されたい。
- 25) *Unterem Rad*, S. 89.
- 26) *Demian*, S.36.
- 27) 拙著『文学部をめぐる病い——教養主義・ナチス・旧制高校』（松籟社、2001年）『「車輪の下」、あるいは男の証明』の章を参照されたい。
- 28) ところで、相沢謙吉のモデルは、鷗外の終生の友であった賀古鶴所であるが、『キタ・セクスアリス』にも、やはり賀古鶴所に似せて作られた古賀鶴介という、主人公の親友が登場する。主人公は、「硬派」の古賀と英語学校（大学予備門）の寄宿舎で同室となり「慄然」とする。「古賀は観骨の張った、四角な赫ら顔の大男である。安達という美少年に特別の保護を加えている処から、服装から何から、誰が見ても硬派中の錚々たるものである。それが去年の秋頃から僕に近づくように努める。僕は例の短刀の柄を握らざることを得なかった」。結局、古賀はそうした「硬派」ではなかったのだが、相沢と豊太郎の関係を示唆するものではあろう。
- 29) Hans Carossa: *Verwandlungen einer Jugend*. Frankfurt a.M. (Insel) 1992, S.14.
- 30) Ebd., S.42f.
- 31) Ebd., S.57f.
- 32) Ebd., S.58f.
- 33) Robert Musil: *Die Verwirrungen des Zöglings Törleß*. Hamburg (Rowohlt) 1997, S.15.
- 34) Ebd., S.103.
- 35) Ebd., S.107.
- 36) Ebd., S.114.
- 37) Ebd., S.108.
- 38) Ebd., S.82.

- 39) Ebd., S.41.
- 40) Ebd., S.58.
- 41) Ebd., S.117.
- 42) Ebd., S.74.
- 43) Ebd., S.83.
- 44) Ebd., S.122.
- 45) Ebd., S.127.
- 46) *Unterem Rad*, S. 75f.
- 47) 前掲の拙著, 282頁参照。
- 48) Thomas Mann: *Tonio Kröger*. Frankfurt.a.M. (Fischer Taschenbuch Verlag) 1977, 27f.
- 49) Ebd., S.65.
- 50) Ebd., S.11.
- 51) Ebd., S.31.
- 52) Ebd., S.36.
- 53) Ebd., S.38.
- 54) 佐々木英昭は、漱石の作品のなかに、劣位にありながら、男たちの「自惚」を罰してゆく女たちの形姿を見いだしている。『夏目漱石と女性——愛させる理由』（新典社，1990年）128～131頁参照。

註で触れなかった参考文献

- 1. John Neubauer: *The Fin-de-Siecle Culture of Adolescence*. New Haven & London (Yale University Press) 1992.
- 2. Rita Marlene Pyenson: *Demian and Die Verwirrungen des Zöglings Törleß. A Comparison*. Dissertation (University of Louisville) 1972.
- 3. Jeffrey Richards: *Happiest days. The public school in English fiction*. Manchester (Manchester University Press) 1988.
- 4. Hans Dietrich Hellbach: *Die Freundsiebe in der deutschen Literatur*. Leipzig (Druck von Max Ferling) 1931.
- 5. 古屋健三『青春という亡霊 近代文学の中の青年』（NHKブックス，2001年）

Friend as “Fuehrer”: German School Stories at the Turn of the Century

Rieko TAKADA

This article aims to clarify the structure of the romantic friendships in school stories in Germany around 1900, which were once very widely read by Japanese students because the equal relation between men was valued in the high culture of Modern Japan.

We show how unsymmetrical in fact the relation is between two male youths in school stories, though they seem equal. The main character is passive and affected by other people, while his friend functions as “Fuehrer” (mentor) and will both protect and subjugate the former.

In this unequal relation, which was traditional in European boarding schools, a difference of age often played a role. Such a male-male-relationship may have been intended to copy the stable different-sex-relationship, in which the man is generally older than the woman.

However, our point is rather that a masculine master depends upon a feminized disciple. Without a pupil one cannot become a master. The “Fuehrer” must be recognized and admired by younger friends.

We portray some patterns where the “Fuehrer” is dethroned in German school stories, and disclose their true colors of anti-friendship.